

## 試験の内容及びその結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 日本語学・日本語教育学分野	氏 名	山口 雅代
試験担当者	主査 名古屋外国語大学教授 廣瀬正宜 副査 名古屋外国語大学教授 尾崎明人 副査 名古屋外国語大学教授 田中真理 副査 大東文化大学教授 田中 寛 (外部審査委員)		

口述試験は2015年2月12日午後2時より約2時間にわたり名古屋外国語大学5号館3階の533教室で行われた。

試験の冒頭、学位申請者から研究の目的と意義、研究課題および研究で得られた主な知見について説明がなされた。その後、審査委員から論文に関して質問とコメントが出された。その主な内容は以下の通りである。

(1) 「戦中」がどの時期を指すかが明確ではない。太平洋戦争に突入した1941年12月8日から敗戦までを「戦中」としているようではあるが、日本語教育あるいは日本の国際文化事業の歴史的変遷を考えると、1937年の日中戦争（支那事変）からを「戦中」と捉える視点もある。

(2) 日本軍とは、陸軍省・海軍省のような行政組織をさすのか、実戦部隊の兵員を指すのか、あるいはその両方なのか、「日本軍」の意味するところが曖昧である。

(3) 日本語教育には、国が行った日本語教育政策と教育現場で日本語教師が取り組んだ日本語教育活動という二つの面がある。その区別をより明確にするとよい。

(4) 歴史的事実が丁寧に記述されているが、その事実をどう捉えるかという考察が物足りない。

(5) 序論では言語普及と言語教育について理論的な論述が展開されているが、本論における論述および結論との関係が希薄である。

(6) 論文の構成や文章表現に分かりにくいところがある。

以上のような指摘に対して、申請者は誠実かつ的確に答え、研究テーマについて深く理解していることを示した。

審査委員からは本論文の評価すべき点として以下のような指摘がなされた。

(1) オーラルヒストリーの手法を用いて歴史の生き証人から戦時中のチェンマイにおける現地タイ人と日本兵との接触の様子を聞き取って生き生きと表現したこと、またこれまで空白であったチェンマイ日本語学校の実態を明らかにしたことは顕著な功績である。

〔別紙２〕

（２）タイの日本語教育史を日本とタイの両方の視点から捉え、言語接触の実態を一次資料を用いて検証した点は高く評価できる。

（３）タイの日本語教育史を日本軍との関わりから捉えようとする意欲的な研究であり、今後さらに追究すべき日本語教育史の課題である。

（４）申請者はかつてチェンマイ大学で日本語教育に携わり、タイ人教師をはじめとして現地のタイ人との人的つながりを深めた。その経験が本研究の原点にあると推察される。海外で教える日本人教師がその地の日本語教育の歴史に関心を寄せ、本研究のような成果を生み出していくことが日本語教育の健全な発展のために望まれるところである。

口述試験を通じて学位申請者が真摯な研究者であり優れた学識を備えていることが明らかになった。よって、審査委員会は全員一致して、博士の学位を授与するにふさわしいと判断し、「合格」と判定した。

以上